

近代史考

明治維新、肥前史観。

2018、12、10

郵政ユニオン長崎、中島義雄

1、はじめに

今年 2019 年は明治維新 150 年の国の諸行事が終わり、現天皇の退位から新天皇の即位と、新元号が始まる新たな騒動の年だ。では今日の日本を決めた近代史の明治維新とはなんだったのだろうか。

本稿は、薩長史観や竜馬伝説などの司馬遼太郎の小説の世界の明治維新とは異なる肥前から見た歴史観で、近代日本を切り開いたのは誰かを探す。そして幕末期の開明派が扉を開けた西洋化・日本の姿のはずが、王政復古という 1000 年の反動・日本へと変わったのはなぜか。そして改憲の時代のいまを考えたい。

2、アヘン戦争と出島警備の佐賀藩

19 世紀の産業革命と大航海時代の西洋列強によるアジア侵略の歴史は、インドから中国へと向かい、アヘン戦争（1840 年～）で山場を迎える。自由貿易を求めるイギリスは、中国が禁止しているアヘンの輸入を力で認めさせる。この戦争の勝敗を決めたのは圧倒的な海軍力と兵器の差であった。当時の中国や日本の大砲は青銅製で、鉄の弾を飛ばすだけの兵器であった。しかし、イギリスの大砲は鉄製であり、爆薬が炸裂する爆弾で、破壊力は比較にならないほどあり、中国はイギリスに敗れ、香港を割譲される。

「清、敗れる」。これをいち早く知った長崎・出島御番役（警備）の佐賀藩（藩主・鍋島閑叟、32 万石）は、先進国（日本から見た）のはずの「大国の清」が破れたことに驚き、軍事力の近代化と強化を痛感する。

近代化の基本は兵器や造船建設もとの製鉄であった。佐賀藩は反射炉（製鉄所）の建設で、幕府や他藩より 2 年も前にこれを完成させ、製鉄製の新大砲や大型蒸気船などをつくりあげる。そして幕命による長崎港警備には、港の入り口の台場である神の島などに大砲 15 門を備え、イギリスやロシアなどの外国軍に備える。さらに当時としては最新兵器の移動式小型大砲・アームストロング砲をいち早く輸入する。

簡略して言えば、中国を侵略した欧米のネライの次は日本であり、長崎・出島がその標的となるが、佐賀藩による長崎港入口の台場の新大砲がこれに備えた。

3、佐賀藩の財政再建と近代化

1637年、徳川幕府の海禁（鎖国）政策、出島建設以降、170年におよぶ出島警備で佐賀藩は厳しい財政負担を強いられ、1800年ころは深刻な危機にあった。幕府は佐賀藩への参勤交代の一部免除や経済援助をするが、破たんは明確だった。一例だが、佐賀藩主が参勤で佐賀を出るとき、地元の商人たちの借金返済要求行動で、行列が立ち往生したこともあったという。

1800年代、欧州は戦争のさなかで、オランダは滅亡していた。1808年、一隻の軍艦がオランダの国旗を掲げて長崎港へ入る。歓迎のオランダ商館人が乗船するが、実はこれはイギリスの軍艦であり、商館人らは逮捕され、イギリス軍は水、食料、燃料などを強要する。出島警備役の佐賀藩は、太平の世の中と財政難のおり1000人警備に手抜きをし、兵が足りず、イギリス軍艦と交戦できなかった。いわゆるフェートン号事件である。長崎奉行は引責、切腹するが、佐賀藩主にも6か月のちっ居（謹慎）が命ぜられ、藩は取り潰しの危機に陥る。この事件以降、佐賀藩は近代化、財政再建が最優先課題となる。

このとき、寛政の三博士の一人で昌平坂学問所（のちの東大）の学長の儒学者、古賀精里（佐賀藩）の息子で、同じく儒学者の古賀穀堂は、藩校の弘道館を立ち上げ、人材育成、近代化や財政再建を取組む。たとえば耕作地の拡大では、有明海の埋め立て地の新田には、農民に特権（私有化などの自由経済的な）利益を認め、耕作地の急速な拡大を図る。この結果、佐賀藩は全国に先駆けて財政再建を成す。穀堂は佐賀藩主・鍋島閑叟の教育係りでもあり、閑叟の先進思想は彼による。

またのちに種痘を初めて行なって、西洋医学の祖とされる蘭方医の伊東玄朴はこの弘道館から育ち、シーボルトに学び、蘭方医として初めて將軍の御典医となる。佐賀藩の医学が日本のトップにあった。

古賀一族は中国からの渡来人で、祖は三国志時代の劉備玄德である。（「古賀穀堂」、佐賀城本丸資料館発行にある）。また穀堂の息子・大一郎は同じく幕府の儒学者であるが、幕末期のロシアのプチャーチャンとの開国交渉の交渉団・川路聖謨（勘定奉行）とともに参加する。ちなみにこのときの通詞は、後述する佐賀藩で活躍したオランダ通詞の西成量である。

だが日本はまだ太平の世であり、幕府の学問＝朱子学派（儒学）が唱える海禁（鎖国）、蘭学禁止の時代であった。異学禁止の蛮社の獄は1839（天保10）年だが、佐賀藩の近代化、洋式化はそれ以前から始まっている。

佐賀藩の洋学化は、藩主・閑叟の義兄で、武雄2万石の領主である鍋島茂義に始まる。茂義は長崎のオランダ通詞兼西流外科の西成量を300石の家臣とし

て抱える。西は鍋島家の財力で数百冊の蘭学書を買求め、その中にある製鉄、造船技術や兵器（アームストロング砲）の作成図を学び、独学で大砲を作り上げる。茂義は自らも 1832（天保 3）年に、長崎の砲術家の高島秋帆の門下に弟子入りし洋式法術を学ぶ。

これらの大砲などは現在、佐賀市内の佐賀城本丸資料館や武雄市民俗資料館などに展示されている。幕府の蘭学禁止令の中、蘭べき大名（蘭学好き）として有名な佐賀・肥前の鍋島藩の藩主・鍋島閑叟は、大名としては許されていなかったオランダ軍艦に初めて乗り込み、洋式海軍や鉄製大砲などを実際に見学した人でもある。

このように佐賀藩の情報入手は出島御番のおり、オランダ商館人やオランダ通詞（日本人の通訳）よりもたらされていた。佐賀藩は豊富な人材育成で、医学、軍事、造船、製鉄などで、全国のトップにあり、政治的にも指導的な力があつた。

たとえば、長州藩の反射炉は最後まで完成せず、薩摩藩の反射炉は閑叟の従弟である薩摩藩主の要請で、佐賀藩から人が派遣されて完成し、幕府の伊豆・葦山の反射炉は、代官の江川太郎左衛門の仕事とされるが、事実は佐賀藩の支援によって完成している。こうした開国・開明派の佐賀藩の存在なくして、戦争回避の出島警備、明治維新の無血・開国はなかったと思う。肥前史観の具体的な事例である。

4、ペルー来航を把握していた幕府

日本の近代史、幕末期の扉を開いた最大の事件は、1853（嘉永 6）年のアメリカのペルー来航があげられる。たしかに黒船襲来は日本を驚かす大事件と学校で習った記憶があるが、実はときの江戸幕府（老中首座・阿部正弘）は、このペルー来航を一年も前に把握していたことはあまり語られない。（東京堂出版「日本史年表」には出来事が記載されている）。

海禁策（鎖国）中の日本の海外事情把握は、出島駐在のオランダ人が 1～2 年に一度、幕府へ出す「オランダ風説書」であつた。このときの「風説書」はオランダ商館長のクルチウスが出したもので、ペルー来航の前年の 8 月 17 日に出版されている。その中にはアメリカ議会がペルーの日本派遣や目的（開国・通商要求）軍艦の名前、規模、兵力も書かれていた。しかも航路が太平洋ではなく、アメリカ東海岸を出て、大西洋、インド洋、琉球経由という行程も把握していた。幕府も海防強化の命を出してはいるが、砲艦外交への具体的な対応は指示していないのは、危機意識が足らなかったのだろう。たとえば当時は、500 石以上の大型船建造禁止令があつたが、幕府はこれを解除していないし、外国船の

輸入も始まっていない。海の国防意識はあったが、応戦=海軍力という発想が皆無であった証拠だろう。

6月3日、横須賀沖に来航したペルーの開国要求に対して、幕府はアメリカ大統領の国書を受け取り、事実上、国を開く。ときの将軍は第12代の徳川家慶(いえよし)であったが、この20日後に死亡している。ともあれペルーは「来年にまた来る」としていったん琉球へと引きあげ、黒船騒動は終わる。

老中・阿部は、このあと、佐賀藩を呼び、江戸湾の台場に新式大砲200門の設置を要請し、佐賀藩はとりあえず50門の設置を行う。(「幕末維新と佐賀藩」(毛利敏彦)の歴史本では、幕府の命令(無給奉仕の役)ではなく、金5万両を幕府が出して佐賀藩にお願いしたとある)。

5、老中首座・阿部と勘定奉行・川路の開国交渉と決断

しかし、開国要求はアメリカだけではなかった。押し寄せる西欧からの開国、通商の圧力。時代は幕府にとって、一難去ってまた一難であった。ペルー来航の直後の翌月の7月18日、ロシアのプーチンが軍艦4隻を率いて、長崎に入港を強行する。最初、彼らは江戸へ向かうが、幕府が面会を拒否し、「長崎へ向かえ」となり、長崎入りしたのだ。このロシア来航は、アメリカよりもっと重大な問題を抱えていた。当時すでにロシアは、幾度か北海道周辺で武力攻撃をしており、北方は軍事的にも緊迫していたし、なによりも樺太などの北方領土の線引き確定交渉が待ち受けていたからだ。

老中・首座の阿部は、幕府官僚NO2の勘定奉行・川路聖謨(としあきら・大分の人)を長崎に派遣し、交渉にあたらせる。川路は翌年1月までの3か月間の交渉で、開国の約束をしたうえで、樺太の南半分で国境の線引きをして、領土問題を解決する。(この間の経過は、彼が書いた「長崎日記・下田日記」に詳しい)。なお、なお、当時の下田奉行として、アメリカと交渉した井上清直(旗本)は、この川路の実弟であり、のちに軍艦奉行となり、海軍の強化を図った人だ。

歴史的にはこのロシアとの交渉も重大事であるが、実はもっと注目すべきことが、この川路の長崎入りで起きている。この交渉の大役を終えた川路は、江戸へ帰る前に、長崎港外での佐賀藩による大砲の実射実験場に立ち会う。これは出島警備役の佐賀藩が長崎港入口の神の島と四郎が島に築いた台場の砲台から、伊王島沖の1.5キロ先の標的へと向けて行われ、その破壊力と正確性(12発中10発命中)に川路が驚いたとある。事実、この神の島に備えつけられていた鉄製大砲15門が、幕末期の日本の開国、開港、通商で最も軍事的緊張が高まる長崎の港を守ったといえる。川路は江戸へ帰り、このことを幕府へ報告した

ことはいうまでもない。「幕末維新と佐賀藩」毛利敏彦)。なお、幕末期に、長崎での外国船と佐賀藩の戦闘はなかった。

川路の長崎での日本初の領土確定交渉と、佐賀藩の近代的な軍事力が、維新・日本の開国を支えたのであり、老中・阿部の開国決断にこそ、その起点があるし、その交渉の地が下田だけでなく、長崎にもあることは注目すべきである。

余談であるが、1854年の長崎・神の島の大砲実射実験に先立つこと13年前の1841年に幕府の大砲の実射実験が、武蔵国の徳丸ヶ原で行われた。現在は東京の板橋区だが、砲術家の名前・高島秋帆(長崎の人)にちなみ、高島平と地名がつけられた。しかし、このときの高島の大砲は青銅製であったが、西洋化と開国に反対する幕府(老中、水野)は、1842年、この高島に汚職疑惑をもって逮捕する。これで高島秋帆は町年寄(市長)職を罷免される。この弾圧で日本軍の西洋・近代化は10年も遅れたとされる。しかし、そのご、ペルーが来て、幕府は軍備の近代化の遅れを痛感し、高島秋帆の刑を解く。

この高島秋帆旧邸は、長崎、思案橋、丸山の隣町の東小島の高台(長い階段で車が行かない不便な地)に保存されている(原爆の被災は距離的に遠く受けていない)が、訪れる人もあまりない。幕末・日本の軍備の近代化の第一人者である高島の存在を知る人は、長崎にもあまりいないからだ。近所の丸山(遊郭跡)や向かいの山には坂本竜馬の像が二つも建つのに、である……。

6、佐賀藩・家老の鍋島・深堀家と江藤新平

江戸時代、長崎は天領であり長崎奉行が治めていた。その天領の周囲は東部と南部を佐賀藩が、北部と西部は大村藩が取り巻いていた。長崎市南部の深堀町は、その天領・長崎の南方面へのびる長崎半島の付け根、いまは埋め立てや橋で陸続きとなっている香焼島や伊王島への通り道で、長崎港の入口にある小さい漁港町である。ここの地名は日本サッカーのA代表の森保一監督がこの地(深堀中学校)で過ごしたことから、今年、全国に紹介された。しかし維新のころも深堀領は重要な役割を果たしている。

長崎港の沖合にある伊王島と高島、神の島などのいくつもの島々は、佐賀藩の飛び地で、深堀・鍋島家(鍋島藩32万石の家老で6000石の旗本)が一带を領有支配し、長崎に出入りする船から通行税を取り、出島警備に重要な役をしていた。

今回、森保監督の就任で、思わぬところでローカルながら「深堀」の名前が出たが、明治維新の直後、佐賀藩の下級武士ながら維新政府の初代司法卿(法務大臣)の江藤新平が、征韓論で敗れ野に下ったのち、妻の実家のあるこの深堀の地で過ごしていた(隠遁)ところでもある。が、思わぬ佐賀の乱で反乱軍

のトップにかつがれ、急きょ彼は佐賀に戻るが、結局、乱に失敗し、薩摩へ逃れるが保護を断られ、土佐へ逃げて捕まり、大久保利通により裁判抜きで、即日処刑されたことで知られる。江藤は自分が作った刑法の下での裁判を要求したが、かなわなかった。

江藤の銅像は、佐賀駅近くの神野公園に巨大な姿が立つ。同じく明治に二度も総理大臣をした佐賀出身の大隈重信も市内の記念館に銅像が立つが、大きさは比べるようながないほどに江藤が大きい。佐賀県人の想いがあるのだろうが、国へ反乱を起こし、国賊として処刑されているが、地元での彼の評判は大きい。ちなみに江藤は佐賀の七賢人のひとりでもある。

江藤は1862年(明治維新の6年前)に脱藩し、京都へ登り、長州の木戸孝允らと交わり、公家の姉小路公知のボディガードをしながら、全国や世界の諸情勢を学び、「京都見聞」などを書き、佐賀へ帰るが、捕えられる。当時、脱藩は死罪であった。しかしこの江藤に対して、藩主・鍋島直大(閑叟)は彼の優秀さを「上申書」で理解しており、「後日使える人材」として死罪を許し、永ちっ居(無期謹慎)とした。江藤は福岡の県境の背振山の奥深い山中にある金福寺に隠れ住みながら、命をつなぐ。いまもその寺と隠れ家の洞穴が残る。

江藤は維新後、佐賀藩から中央政府に派遣され、初代司法卿(法務大臣)、文部大臣などで働き、維新政府の骨組みをつくる。彼の功績はフランスの法や議会、教育などを基礎に、四民平等の意識で導入したことが大きい。なによりも江藤自身が最下級武士の貧しい日常から、こうした意識が生まれているという。

一番の功績は、フランス民法(ナポレオン民法)の導入のための編纂会議での江藤の態度である。当時の日本には国民という言葉や権利という言葉もなかったし、民(たみ)の法律という意識もなかった。民法の必要性すらなかったのである。当時の福沢諭吉ですら国民のことを国人と書いていることから明らかだろう。

そのころの経緯を明治初期、日本初の法学者で東大教授を経て中央大学を創った穂積陳重(のぶしげ)は、その著「法窓夜話」のなかで、以下に述べている。「維新後の明治3年、民法編纂会議の会長であった江藤先生(新平)は、『フランス民法を日本民法と書きかえるだけでいい。誤訳を恐れず、早くしろ』と督促する。そして、そのご、司法卿となった江藤先生は日本の五法づくりに貢献された」と書いている。学者としては無理難題を要求するとんでもない政治家であったが、「彼のような進取の人でなければ、明治の五法や四民平等の国民皆教育制度もできなかつた」ともいう。江藤こそ日本の法律の父、学校皆教育制度の父である。

7、日本初の首相公選

幕末期から明治の初めの維新政府は、金がない、人がいない、力がない、人気がない状態だった。百姓一揆が多発し、開国、開港、貿易の自由化で米や生糸の輸出が増え、国内には物不足（衣食がない）が進み、インフレが高まる。1858年の通商条約締結以降、不平等条約のための、日本の金、銀の資産は急速に国外へ流出し、江戸幕府は倒産の危機に立つ。また政治的にもすでに徳川の威厳はなく、武士階級の支配力も失われていた。

そのなかで尊王の復古主義が台頭し、天皇中心の統一国家づくりが進んでいく。東京遷都、天皇の江戸城入城の際に、「天皇って誰？」という江戸の町民に、天皇の名前で酒樽 3000 個が配られ、慰撫策が進む。そのころのことを、「さしずめ江戸の町中はお祭り騒ぎであった」と「日本の歴史」(小学館 12)は書いている。

しかし一方で、欧米の近代国家、議会主義を学んだ人たちは、議会や憲法をもつ近代国家づくりも模索する。徳川派、朝廷派の対立が深まるなか、新政府は、明治 2 年 5 月 13 日、それまでの動けない議定制度（議定と参与十六名の集団指導部）を廃止し、改革のために高官公選を行う。これは政府高官の三等官以上の役人による首相選挙であった。

この明治維新の大混乱のさなかに、日本史上初の事実上の首相を選挙で選ぶことが行われたのだ。これは歴史的にも驚きである。選挙結果は、輔相（首相）が三条実美（公家）49 票。議定（副総理）岩倉具視（公家）48 票。同じく、鍋島直正（佐賀肥前藩主）39 票。同、徳大寺実則（公家）36 票。参与（大臣クラス）大久保利通（薩摩）49 票。木戸孝光（長州）42 票。副島種臣（肥前）31 票。東久邇通禧（公家）26 票。後藤象二郎（土佐）23 票。板垣退助（土佐）21 票。の十人が選ばれた。（小学館の日本史）

歴史本によれば、この選挙実施は、大政奉還や版籍奉還問題にうるさい旧大名・藩主の排除劇であった。そして一方では、西洋と同じ政治体制を唱える開明派と、王政復古朝の守旧派の争いでもあったとも書いている。別の本では岩倉、鍋島の連立政権だったとも書いている。三条はそのご 19 年間トップにあるが、実際は飾りであったというのが定説である。

政権 NO2 についての佐賀藩主の鍋島閑叟はそのとき 56 歳である。閑叟自身が薩摩藩主の従弟にあたり、妻（正室）が 12 代将軍・家斉の息女であり、歴代将軍の大叔父となる関係から、幕府方、朝廷方双方の仲介役として、副総理に推されたのである。無論、戊辰戦争から上野山の戦争や会津戦争での佐賀藩の近代兵器での働きの論功行賞（後日、天皇から石高を加増される）でもあったのだが。

しかし残念ながらその 2 年後に閑叟は病死する。だが、岩倉の鍋島閑叟への信頼は高く、自らの息子 2 名を佐賀の藩校へ預け、教育を依頼していることから、両者の関係の良好性はうかがわれる。

こうした歴史過程を経て、結果的に史実では、王政復古派が勝ち、守旧・日本の明治が生まれ、明治の帝国憲法と国家元首としての天皇を置く、絶対天皇制が出来上がるのである。将軍・慶喜がそうであったように、開明派もまた尊王の高まりの前に無力であった、としか言いようがない。

8、攘夷派と天皇

ペルーの開国要求に対し、老中首座・阿部正弘は、その国書を受け取り、広く諸大名らにこれを開示し、それぞれに意見を許した。徳川幕府 265 年の歴史の中で、征夷大將軍が専有する外交権に、広く公論を求める老中の態度は異例であり、その公論・開明思想は特筆すべきである。また逆に、この無方針が幕府の権威を一気に崩壊させたとする論もある。まさに幕府自身がパンドラの箱をあけ、八子の巣をつついたのである。

ともあれ、この阿部にたいして、攘夷派（排外主義、外国船打ち払い）はどうだったのか。攘夷派の代表は水戸派や孝明天皇であった。欧米が求めた兵庫（神戸）開港に天皇は、京都への脅威が強まるとして反対した。日本の行く未より、自分（京の都）の安全が優先したのだろうか。孝明天皇は大混乱の 1867 年 1 月に突然、病死する。攘夷に固まる孝明天皇は、最後は開国派（岩倉具視？）に毒殺されたとの噂がいまも絶えない。（歴史本も出ている）

また国学派の代表である水戸学派の藩主の水戸斉昭は、海防係りを命じられていたが、外国船打ち払いを主張し、自らが「アメリカ軍艦と一戦交える」と、幕府に詰め寄り、海防係りを罷免される。また、当時の国学の代表で勝海舟の義理の弟になる佐久間象山は、「風船爆弾を飛ばしアメリカを攻撃せよ」と幕府に建言した。（なにやら、先の太平洋戦争と同じようだが）。その弟子となる吉田松陰は、アメリカの軍艦に乗り込もうとして逮捕され、のちに処刑される。当時の国学の攘夷論では欧米の開国要求に対応できなかったのだ。

また幕府打倒で攘夷論を唱える薩摩藩や長州藩は、外国軍を攻撃し、反撃にあい、多額の賠償金の支払いを課され、これも結局、幕府が肩代わりしている。そして両藩もこののち開国派に転じる。現実の攘夷派は、彼我の力関係を知らぬ外国人排斥の国家論、戦争論であり、西欧列強に対応できる軍事力の備えはできていなかった。

9、天皇の登場と徳川方の幕末期の最後

長崎の人で、日本初の明治期の政治ジャーナリストである福地源一郎は、福沢諭吉らとともに日米交渉団の通訳として咸臨丸で渡米している。帰国後、新聞社などをおこすが、彼の評価は諸説ある。その福地が明治 20 年ころに書いた

「幕末の政治家」(岩波文庫)で、「幕末期の一番の政治家は阿部正弘なり」としている。阿部は広島・福山 10 万石の藩主であるが、1825 (天保 14) 年に 25 歳で老中となり、1864 (安政 4) 年に 39 歳で亡くなるまで務めた。普通、老中の任期は 5 年が平均であるが、阿部は 24 年間も激務こなし、激変の渦中に病でなくなる。もし、阿部が死ななければ……という歴史観もいまや、遅いが。

この後、老中を継ぐのが堀田正睦である。かれは攘夷派の水戸斉昭に勝てる力もなく、開国、開港、条約締結に混乱が続く。しかしアメリカは待ってくれない。1958 年 1 月 4 日に幕府はアメリカのハリスに 60 日以内に条約締結を約束する。幕府は 1 月 8 日に、老中・堀田を京都へ派遣するが、天皇は条約締結を認めない。1 月 10 日にハリスは条約交渉を議了し、江戸から下田へ帰る。3 月 20 日、天皇は老中・堀田へ条約拒否を告げる。4 月 23 日、井伊直弼が大老となる。6 月 19 日に下田奉行・井上清直が日米通商条約を調印。6 月 21 日、老中・堀田が罷免される。

これが日米交渉条約締結と幕府、朝廷の動きの時系列である。結局、幕府は、事態を動かし、攘夷派を抑えるために天皇を頼る。幕府は条約締結の天皇の裁可を求めて京へ二度も赴くが、堀田らも天皇を説得できなかった。征夷代将軍の名代が外交権で、天皇に負けたのだ。石高でいうと徳川家は 700 万石、天皇は 2 万石。この力勝負の結果が幕末期の力関係を内外に明らかにする。そしてこれをきっかけに、鎌倉幕府以来、700 年間も続いた存在だけの象徴制天皇が、政治の表舞台に現れる。これが幕末期の天皇の登場の背景である。(歴史での神戸開港は、15 代将軍の慶喜が天皇に直談判して、同意を得ているとされるが、混乱のさなか、尊王派の慶喜もふくめて動揺と混乱が続く)

この京都での幕府と朝廷の交渉。このときの堀田の役割も重要である。堀田の生涯を描いた小説「開国」のなかで佐藤雅美は、「堀田は日本をいち早く国際社会の仲間入りさせることを目指して、孤軍奮闘した優れた政治家である。しかし、その前に天皇が立ちはだかった」と書いている。

もう一人、幕府官僚では、先にも書いたが川路聖謨(勘定奉行)の存在を抜きに幕末は語られない。川路はペルー来航の前の年の 1852 年から 6 年間、勘定奉行を務める。彼を書いた小説に、吉村昭の「落日の宴」があるが、「激動の中で日本を守った男」とされ、非常に評価が高い。川路は江戸城開城の 1868 (慶応 4) 年 3 月 15 日に、徳川家に殉じて自決し、二君に仕えずの最後の武士だったと書かれている。

10、佐賀藩の実像は尊王・開国

こうして幕府が終わり、明治維新が始まる。いわゆる西国雄藩の四藩の存在

で、最後は官軍についた肥前・佐賀藩である。が、藩の方針で開明・開国の国家を目指していたかといえ、必ずしもそうではないし、佐賀も国学の盛んな地でもあったし、有名な国学者で、藩校の教授を務め、佐賀の吉田松陰といわれる枝吉神陽もいる。藩主・閑叟も、蘭学には熱心だったし、自由貿易には賛成だが、いきなりの全面開国には慎重だったとされる。江藤も武士階級の権利復活の佐賀の乱を起こしているのだから、四民平等をいうが、民主国家の人ではない。また枝吉の尊王・国学を熱心に学ぶ生徒であったことも明らかだ。(当時としては当たり前だが...)

藩政改革の指導者・古賀穀堂は、佐賀藩の武士道の教えとされる「武士道とは死ぬことと見つけたり」の「葉隠」を、藩政改革には役に立たないとしている。これは「死ぬこと」を、国への奉公として当然視するために、明治になってのちの軍隊が使い始めたものであるとされる。

11、天皇制と国民の慰撫策

万世一系、2700年といわれる天皇家も、史実に残るのは6~7世紀ころとされる1400年の有史的な存在だが、実際は1185年の鎌倉幕府の始まりで実権を失い、以降、明治期までの700年間、いくつかの王政復古の動きはあったが失敗し、天皇は存在だけの、まさに象徴天皇制であった。

とりわけ江戸時代の政治的実権は、1627(寛永4)年の紫衣事件で、天皇が持っていた高僧への官位任命権を幕府に奪われることで、失っている。このとき後水尾天皇はこれに怒り、抗議の退位をしている。それくらい大事な天皇の権威だったのだ。また財力だが、徳川家の700万石の禄高と比べ、天皇家は2万石でしかなかった。1623(元和9)年、将軍・家光の征夷大將軍の任命のとき、幕府がそのお礼として、皇室御料1万石を加増して、計2万石となった、と歴史年表にある。このように天皇家は政治的実権も経済力も無力の徳川時代であったのだ。

古くから京都、大阪など上方と呼び、天皇が住む都としてはあったが、江戸時代、幕末期まで、将軍はほとんど天皇を訪ねてはいない。幕末期、江戸の町民も天皇の存在を良く知らなかった。前述したように、東京遷都、天皇の江戸城入城のとき、酒樽を町民に振る舞い、人気取りをしたくらいだ。今でいう慰撫策だろう。

そしていまだ。今の皇太子の新天皇の即位式にあたり、政府は4月~5月に10連休法を成立させた。これから他にもいろいろ出てくると思うが、10連休は史上初だという。これも皇室行事に伴う現代の国民への慰撫策だろう。連休で休める人、収入が保障されている人はともかく、働く人の半数近くの非正規の

時給労働者は無休 10 連休法となる。事態は別の意味で深刻だ。

12、いま

そしていまにもどる。改憲派の改憲の目的と中身が具体性を帯びてきた。彼らは明治の大日本国憲法と天皇の元首化が改憲の目的地なのだ。これは自民党の改憲論で自明であったが、9 条改憲論が先に争点化し、戦争か平和かの選択を国民は考えていた。しかし敵は本能寺にありだったのだ。

以下は密室のことで知る由もないので推察であるが、9 条改憲はともかく、天皇制のあり方は、天皇家にとってもっと深刻であると思う。そして現天皇の象徴制でいいとする（？）論と、自民党の改憲論は明確に対立する。このあつれきが、護憲派と思われる現天皇の（一元一世を否定する）生前退位までいきついたのでないか。天皇は高齡を退位の理由とするが、今の改憲=元首化の風潮を嫌った末の退位劇ではないのか。また皇族が大嘗祭公費支出に異議を唱え、宮内庁長官への批判まで出た。天皇交代のこの時期、異例といえば、異例である。

また靖国神社の宮司による「天皇は靖国をつぶそうとしている」という批判や、その後、それをめぐり宮司の辞任劇もあった。また「天皇は祈っていればいいのだ」という、保守派の天皇家への「余計なことはいうな」という趣旨の批判も出ている。無論、国民にとって、天皇批判も退位要求も自由である。国民としての権利であるからだ。天皇も自由に発言はしてもいいと思う。

こういうなか、改憲=天皇の元首化という策動が明白になるにつれて、現状は、過去、明治維新で天皇絶対制の中央集権の統一国家づくりをした維新政府と同じ質の、自民党・保守派の攻勢の結果だろうか。これらも再考することが必要なだろう。

なぜなら、明治維新の天皇家利用の国づくりの歴史は、現代の保守政治家にとって、決して、遠い過去の出来事ではなく、自分たちの少し先祖の生きた時間と重なるのだから。

いまは政治家の二世や三世は当たり前前の時代となり、政治家にも家系=血筋が重要視される新たな階級社会となっている。一例だ。安倍内閣の副総理の麻生財務大臣は、その存在も発言も傲慢そのもので、日本の政治のドンとでもいうべきか。そのことを可能にしているのは、彼の力ではなく、彼の血筋=家系にあるともいえる。

麻生の家系=血筋を見してみる。麻生は明治の元勲、大久保利通を高祖父とする家系にある。麻生は、最初の選挙で「下々のみなさん」といったという逸話もある。麻生の祖父は戦前の外交官で、戦後では一番の首相・吉田茂である。戦

後処理でサンフランシスコ平和条約と日米安保条約を結び、戦後日本の今を決めた政治家だ。

この吉田茂の岳父が牧野顕伸である。牧野は大久保利通の二男である。牧野は戦前の政治家であり、宮相として昭和天皇の最側近であり、戦前の時代を決めた有力な政治家でもある。また内相も務め、弱腰外交や軍部との対立もあり、2・26事件では軍部の襲撃を受けるが難を逃れている。

そして大久保はその牧野の実父である。大久保は明治維新に活躍した薩摩藩の武士である。大久保は明治11年に暗殺されるが、当時、事実上の首相として彼が作った官僚機構は、今も続いているという人もいる。

こうした人脈で明治以降続く日本の政治劇。また天皇制と元号制と官僚制。君主か象徴か。新天皇の即位という時代の転換点に、綱引きが行われているのだと思う。こうしたこともあわせて、幕末期=明治維新と現代の改憲の時代を再考する機会としたい。

13、さいごに

最後に、幕末期の日本は、開国派の幕府高官の存在抜きに書かれてはならない。一般には徳川幕府方は鎖国と攘夷派で、開国の反動とされて、評価は低い。幕藩体制時の守旧派だから当然といえば当然だが、しかし、欧米の植民地化回避も、また全国的な内戦なしの開国も、幕府の決断なしにできなかったと思う。(維新直前のいくつかの戦争はあったが)。

明治維新に勝ち残った人たちが、後から書いた国学的な歴史論で薩長史観ができるが、幕末期と開国の始まりは、1854(安政1)年の日米和親条約締結の締結にあり、徳川幕府の高官が行ったのは明らかである。孝明天皇でもなければ吉田松陰でもなく、佐久間象山や勝海舟でもない。無論、1867年に暗殺された坂本竜馬でもない。この歴史的事実は明白である。歴史は事実をもとに正しく語られなければならない。

なお、歴史好きの方にお勧めの本がある。「文明開化は長崎から」(集英社。広瀬隆)上下巻の二分冊は、「黒船来航より前に日本は開国していた」と書き、維新の志士たちの功績論を見直す歴史観が描かれている。一読されてはと思う。